



日 口 交 流

発行 : 特定非営利活動法人 日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax : 03 (5563) 0752



中村喜和先生の講演会「日露交流の歴史—隣人として400年」を聞いて グリゴリー・ミソチコ

3月25日、中村喜和先生による「日露交流の歴史—隣人として400年」という講演会が日比谷図書文化館で行われました。講師の中村先生とは、「来日ロシア人研究会」(2016年10月の100回目の例会を機に活動休止中)で約10年前に知り合って以降、日露交流の様々なエピソードを扱った中村先生の研究報告を何度も興味深く聞いてきました。しかし今回は、日口交流協会が企画した講演会において、特定の時代や人物に限定されない、日露交流の数百年の歴史の全体像について講演して下さることを知り、喜んで参加させていただきました。日露交流史の第一人者である中村喜和一橋大学名誉教授から、こうした非常に長いスパンでのお話が聞けるのは絶好の機会であり、歴史が専門でない私にとっても大変有意義な時間となりました。講師の中村先生、並びに日口交流協会の皆様に深く感謝申し上げます。



質疑を含めてたった2時間半で日露交流のすべての歴史を

お知らせ

●テーマ別ロシア語クラス開設

日時: 2017年5月7日(日) 13:00~16:00

テーマ: 第1回「病院編」

講師: スニトコ・タチヤナ

授業料: 会員3000円、一般4000円

*毎回、テーマをしばり、観光や文化紹介など実践に役立つ講座です。不定期に開催されますので1回だけでもご参加ください。「こんな言い回しはロシア語でどういえばいいですか?」など質問もお持ちください。

●夏休み短期ロシア語留学

授業日: 2017年8月7日~11日

場所: ハバロフスク、太平洋国立大学

費用: 会員60,000円、一般70,000円

(午前中授業、午後イベント、寮、送迎、ビザ代含む)

*往復の航空券、ホテルご希望の方はご相談ください。

●第41回マトリョーシカ絵付け教室

日時: 2017年5月14日(日) 13:00~16:00

講師: 菅野エレナ

場所: 田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」造形表現室
(田町駅より徒歩5分)

会費: 3,000円(5個セットの教材、講師代、お茶代含む)

*2回目以降の参加で教材をお持ちの方は2,000円です。

*第42回マトリョーシカ教室は6月11日(日)です。

お問い合わせは協会事務局まで

Tel : 03-5563-0626 nichiro@nichiro.org

語りきることは当然無理ですが、中村先生は略年表を配布資料として準備して下さり、要点を絞ってその年表の大部分について丁寧に説明して下さいました。個人的には、キリシタン日本人ニコラスが動乱時代のさなかの1611年にロシアのニジニ・ノヴゴロドで殉教の死を遂げた事件についての知識が浅く、大変勉強になりました。ロシア人が太平洋岸(オホーツク海)に到達したのは1640年頃ですので、その少なくとも30年前から日露間の接触があったこととなります。しかし、ロシアがこうして日本列島の近くまで領土を広げても、その頃の日本は鎖国が始まろうとしていた時代であり、17世紀にも、続く18世紀にも日露間の交流が盛んになることはありませんでした。幕末や明治維新後の明治・大正期には様々な動きがありましたが、20世紀に入るとソ連時代に当たる70年余りの間の交流もまた、隣国としては非常に限られていました。

400年の交流史を振り返ってみれば、日本とロシアは、お互いのことを十分に知らない隣人であり続けた、という印象を持ちました。その間、両国の政府間では、外交関係が全くなかったり、条約が結ばれたり、国境線が何度も引き直されたり、戦争もあつたりしました。こうしたなか何かしらの人的交流は絶え間なく続き、中村先生は、大黒屋光太夫がロシアで聞き覚えた「ソフィアの歌」を紹介して下さいました。この音楽が会場に流れたとき、数百年前の日露交流の舞台上に直接触れたような感じがしました。

中村先生の講演会を通しての一番大きな感想は、このような講義をできるだけ多くの日本人やロシア人に聞いてほしい、という思いです。本来アイヌ民族が暮らしていた島々が日本固有の領土か、ロシア固有の領土か、というように、複雑な歴史をそれぞれの都合のいいように簡略化していつまでも言い争うこともできますが、日露交流史全体を一つの講義にまとめたときに初めて、日露間の交流の奥深さと今後の莫大な可能性が少し別の角度から見えてくることを実感しました。

(筑波大学外国人受託研究員)



皇居ウォーキングに参加して

南 佑果

3月25日、皇居めぐりウォーキングに参加致しました。私にとってはこの皇居ウォーキングが日口交流協会に入会してから初めてのロシアの皆様との交流で、とてもわくわくしながら当日を迎えました。

いざ集合場所へ向かうと、ロシア人の参加者が50名ほどおり、想像していたよりもかなり多くの方が集まっています。一方の日本人の参加者も私と同じ大学生の方と社会人の方が半々くらいの30名弱と、とても多くいらっしゃいました。普段は皆さんとほとんどお会いする機会がないだけに「こんなに多くのロシアの方、そしてロシアに興味や関わりを持つ方が東京にいたのか」とまずは感動してのスタートでした。

当日は天気にも恵まれ、少しの肌寒さはありますが春の始まりを感じさせるような心地よい日でした。生憎まだ桜は咲いていませんでしたが、何種類もの花が美しく咲いていたのがとても印象的でした。これまで見たこともないような珍しい花や木も多く、ガイドの方からの説明でその花々が植えられた歴史的な背景についても学びながら楽しむことができました。

その他にも初めて皇居を訪れた私には新しい発見が多くありました。石垣の話や瓦に装飾された3種類の紋のことなど、聞くこと全てが興味深かったです。中でも、最後のあたりで説明して頂いた江戸城の再建にまつわる徳川家の父・息子関係のこと、外国人アーティストの公演が行われていたという桃華楽堂のお話はとても印象に残りました。



通商代表部きもの交流

千葉 麻里

毎年、恒例の春の楽しみとなっている通商代表部でのきもの体験交流が行われたのは4月12日(水)。品川にある通商代表部のホールで主席代表夫人のエレーナさんと次席夫人オリガさんが音頭をとって、2時前に私たちが到着すると床にはすでにマットが敷かれてあった。前もって郵送しておいた振袖の箱を開け、各自で持ち寄ったきものを1セットずつ置く。女性たちと小さな女の子がそれを見て好きなきものを選ぶと、着付けが始まる。坂本さん、山岸さん、平野さんも応援に駆けつけてくれた。

今年は、ベテランの森美恵子さん、林由美子さんと私の生徒の佐佐木晴さんが来てくれて4人で30人余りに着せた。女の子は着せている間も行儀良く、よほど気に入ったのか2回違うきものを着ていた子もいる。七五三ではよく日本人の小さな子がぐずるので苦労するのだが、この日は全くそれがなかった。

男性の礼装も大きいものを用意した。4名の希望者が



説明はガイドの方がまず日本語で話されたことを参加者の方がロシア語へ続けて通訳をするというスタイルでしたが、日本人・ロシア人の参加者の皆さんが真剣に驚いたようなリアクションや笑顔も交えながらお話を聞いている姿がとても印象的でした。通訳の分時間差はありながらも、参加者全員で同じ楽しみを共有できているのだと実感できました。全体を通して

非常に穏やかな楽しい時間を過ごすことができましたと感じます。

また、私がとても嬉しかったのは今回の皇居めぐりウォーキングを通して新しい友人が出来たことです。参加していた多くの大学生の方と談笑しながらウォーキングすることができただけでなく、ロシアからの留学生の2人とも仲良くなることができました。ウォーキング終了後もガイドの方におすすめして頂いた二の丸庭園と三の丸尚蔵館にその新しい友人達と行くことができ本当に楽しい時間が過ごせました。

今回の皇居めぐりウォーキングでは初めて訪れた皇居についてたくさんのお話を学べただけでなく、多くの人々と出会い、新しい友人も作ることができて自分でも思ってもいなかったくらい充実した時間を過ごすことができました。このような貴重な機会を設けて頂き、本当にありがたい気持ちでいっぱいです。またこのような機会があればぜひ参加をして、次回はもっと多くのロシアの方々との交流を深めていきたいと思えます。

(上智大学国際教養学部4年)



あったが、よく似合って格好良かった。背が高く堂々としているので、黒の紋付に袴は凛々しくて栄える。奥様と並んで写真に納まり嬉しそうだった。子どもと一緒に撮ったり友達同士で撮ったりと、良い記念になったようだ。

4時頃には終わり、いつも通り用意してくださったお手製のケーキなどでお茶をいただく。夕方、大使館での友禅教室が控えていたので早めに失礼しなければならなかったのが名残惜しく残念だった。色々とお心遣いいただき、後日、写真もメールで送ってくださった。春の華やかな楽しいひとときの思い出になった。

(常任理事)

富士市にディアナ号モニュメント完成

加藤 昭夫

静岡県富士市にある田子の浦みなと公園にディアナ号のモニュメントが完成し、3月29日記念式典が行われた。船体は全長が約25m、幅約5m、マストの高さ約20mもある立派な施設である。甲板にも上ることができ、富士山や駿河湾を一望できる。船内には、展示室も造られ「ディアナ号と富士」というテーマでディアナ号にまつわる歴史や救助活動、錨の引き上げの様子などが絵や写真、文章で紹介されている。また斎藤斗志二氏製作のアニメ「幕末のスパシーボ」も常時放映されている。そして、日口修好150周年の記念碑も同所に移転された。

下田で「日露通好(和親)条約の締結」、戸田(現沼津市)で「ヘダ号の建造」は、我が国に国際化と近代化をもたらした。富士では「沈没寸前のディアナ号から地元民が厳寒の海に入り、決死の救助活動で約500名の乗組員全員の生命を助けた。しかも自分達も地震で被災していたが、食料の供給や仮小屋の建設等、献身的にお世話をした」という人類愛に基づく素晴らしい行為が展開されたのである。モニュメント完成により、この逸話が世に広まることを期待している。

ウズベキスタン便り(4)

「NORIKO 学級」の今日この頃4

寺尾 千之

ゴールデンウィークに、全国各地の陶器市巡りを計画していらっしゃる方も多いのではないのでしょうか。ウズベキスタンにも、1000年以上の歴史を持つリシタン陶器があります。20年近く前に、リシタンで窯元巡りをしたときは、陶芸家達の偉ぶらないお人柄や、その技法とエキゾチックな図柄に大いに感動したものです。リシタン陶器は、現NORIKO学級校長ナジロフ・ガニシエル氏と創設者・故大崎重勝さんとの出会いにも大きく貢献しています。

小松市在住のエンジニアだった大崎さんは、1994年当時、独立間もないウズベキスタン着任を控え、現地情報が得られず、頭を抱えていました。そんな折、大崎さんの目に飛び込んできたのが、地元紙の「ウズベキスタンからリシタン陶芸第一人者、ナジロフ・アリシエル氏、九谷焼研修のため来日」の見出しでした。駐ウズベキスタン初代日本大使だった孫崎享氏(小松市出身)が、国際交流基金プログラムを通して招聘していたのです。幸運にも孫崎氏からアリシエル氏を紹介していただき、アリシエル氏からは「実弟が現地でお世話しましょう」との心強い言葉をいただけたのです。

その年の春、タシケント国際空港に降り立った大崎さんを「兄のアリシエルから聞いて、お迎えに参りました」と、ロシア語で出迎えたのが、アリシエル氏の実弟、後にNORIKO学級校長となるガニシエル氏です。その後、ガニシエル氏は宿舎探しなど日本人世話役として尽力する一方、大崎さんから日本語を学び始めます。ある日、リシタンのガニシエル氏の自宅に招かれた際、地元の好奇心旺盛な子ども達から、「大崎おじさん、日本語学校を開いてよ」との声が湧き上がります。こうして1999年に開校された日本語学校は、退職金の一部を建設費用に充てることに賛同された奥様・紀子さんへの感謝を



富士市には、ロシアから贈られた「友好の像」やディアナ号の錨もある。

なお式典当日には、ディアナ号に縁のある下田市、沼津市、富士市が日ロ友好のさらなる推進と情報交換のため三市交流会が開催された。(富士市日ロ友好協会会長・当協会会員)

込めて、「NORIKO 学級」と命名されました。

リシタン陶器は、その後も、さまざまなシーンで人と人を繋ぐ力を発揮します。NORIKO学級出身の青年が、陶芸家である彼の父親をリシタンから呼び寄せ、ゴールデンウィークに益子陶器市のテントでリシタン陶器を紹介したことがありました。青で描かれた鳥やザクロなどの細密画風リシタン陶器に、何人ものお客様が、磁石のように吸い寄せられてきました。陶器が放つ伝統の力と青年の日本語力によって、リシタン陶器は多くの日本人の手元に渡っていったのです。

リシタン陶器の1000年の歴史には遠く及ばなくとも、大崎さんとガニシエル氏の二人三脚から始まったNORIKO学級が、日ロ友好草の根交流の証として、世代から世代へ伝え続けられるレジェンドになって欲しいと、最近では、思うようになってきました。

(リシタン・ジャパンセンター事務局長)



2014年、リシタンのアリシエル工房にて撮影

お願い

NPO 日ロ交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシアに関する講演会、在ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けております。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をよろしくお願い申し上げます。一口千円から、いくらでも結構です。

振込先：郵便口座 00160-9-66486 加入者名：日ロ交流協会
連絡先：日ロ交流協会事務局 E-Mail:nichiro@nichiro.org
Tel:03-5563-0626 Fax:03-5563-0752

＊江守元彦副会長、内堀學専務理事、須藤ひろみ氏、松本泰男氏よりご寄付を頂きました。ご協力有難うございます。

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

モスクワ「ムゼイ」巡り・その5

イギリス商館 Музей старый английский двор 大矢 温

前回ご紹介したロマノフ一族の館の並びに白塗りの古い石造建築がある。これが今回ご紹介するイギリス商館博物館だ。長いこと閉鎖されていたが、2016年1月に博物館として新装オープンした。イヴァン雷帝時代の中世ロシアが唯一、公式な外交関係を持っていたイギリスの出先機関が置かれていた建物だ。もともとは1556年にイヴァン雷帝がロンドンにあった「モスクワ会社」に下賜したものだが、イギリス政府の出先機関の役目も兼務していた。ヨーロッパに開いた小さな窓、という意味で江戸時代の長崎の出島にあったオランダ商館のようなものかもしれない。少し時代が下って17世紀末のピョートル大帝の時代にはここで西欧数学を学ぶ教室が開かれたりもした。

もともとの正式な玄関は外階段を上がって2階から入っているのだが、現在、博物館の一般見学者は1階の入り口から入る。建物の地下室、倉庫に相当する部分から見学が始まるわけだ。ここには樽や袋に詰められた輸入物資、槍や鉄砲などの武器など（いずれも復元模型）が展示されており、ロシアとは違った異国情緒を感じさせる。当時の三本マストのイギリス商船の模型も展示されている。素人目には清教徒をアメリカ新大陸に運んだメイフラワー号によく似ている。ともあれイギリス商人は、こういった帆船で故国イギリスを出帆し、一路北へ白海に至りアルハンゲリスクあたりで上陸したあと内陸部をモスクワまでやってきたとのことである。西に東にとその活動範囲を拡大したイギリス人のバイ

タリティーには圧倒される。博物館の2階には大きなペチカを備えた食堂兼会議室がある。ここでシェークスピアの時代の古書や地図、イギリス人の生活用品など（一部コピー）を見ることができる。ここも前回のロマノフ一族の館と同様に小さな建物なので、小一時間もあれば十分見て回ることができる。

場所は、

Ул. Варварка, 4a (<https://goo.gl/maps/sQ4Yj9FFXwB2>)
月曜休館。入場料は大人200ルーブリ。



(札幌大学地域共創学群教授)

キム・ギウンについて

島田 顕

モスクワ放送の日本語番組開始当初、モスクワ局日本語課の職員として一人の朝鮮人が働いていた。それが、キム・ギウンである。

日本語番組を担当していたコミンテルン職員のプリーシェフスキー(日本語番組編成主任)とヴィルコフが、1941年12月16日にコミンテルンの疎開先であるバシキール共和国の首都ウファから、コミンテルン書記長であるディミトロフに宛てた書簡によると、キム・ギウンは、ムヘンジャン(本名・緒方重臣、モスクワ放送日本語番組最初の日本人アナウンサー)とともに「翻訳係」とされていた。また書簡では、キム・ジャン(本名・野坂龍、野坂参三の妻)は編成係、片山やす(片山潜の娘)はアナウンサーとなっていた。この書簡は、最初にロシア語で出版され、後に日本語に翻訳出版された文書・史料集『コミンテルンと日本共産党』に所収されたものだ。だがこれまでキム・ギウンについて、詳しいことは何もわかっていなかった。

ところで、モスクワ放送の日本語課に朝鮮人職員と一見奇妙な取り合わせに思われるのだが、モスクワ放送日本語課にはこれまで何人かの朝鮮人職員が勤務していた。中でも有名なのが、ヴィクトル・キム氏である。キム氏は、モスクワ放送日本語課に勤務した後に通訳として活躍した。まさにゴルバチョフ時代を代表する優秀な通訳だった。またハバロフスク局では、カン、キム・ミネらも働いていた。

キム・ギウンに話を戻そう。前述の書簡は、公式文書での

ムヘンジャンの存在を証拠付けるものだったが、その中で新たに見つかった謎の人物がキム・ギウンだった。そのキム・ギウンに関する新たな史料を、今年の三月にモスクワで見つけ出すことができた。ルガスビの朝鮮人個人ファイル群の中に、キム・ギウン名の個人ファイルがあることがわかり、閲覧申請するとヒットした。まさに彼のファイルだった。ファイルの中身は二枚の文書のみ。ほとんどがスプラフカ(略歴・証明書)だったが、写真付きのアンケート(個人問診票)もあった。これら史料によれば、キム・ギウンは、モスクワで日本語を習ったという。その後モスクワ放送日本語課に勤務することになった。またコミンテルン党学校の朝鮮語教師に推薦されている。だが確かめられたのは勤務したという事実のみで、その後彼がどのような人生を辿ったのかは書かれていない。状況はムヘンジャンと似ている。ソ連における朝鮮人粛清犠牲者研究の第一人者であるデガイ氏にこのことを相談したところ、ムヘンジャンと同様、戦後からスターリンの死去まで続く第二波の粛清の犠牲となった可能性があるとのことだった。

キム・ギウンとムヘンジャンの粛清の事実を確かめるには、FSB(連邦保安局、KGBの後身機関)の文書館にアクセスするしかない。できるかどうかはわからないが、いまその準備を進めているところである。彼らが非業の死を遂げたのだとしたら、その事実は何としても明らかにしなければならない。